

因果関係を表す接続表現における日中対照研究

——「から・ので」とその中国語相当表現——

新田 小雨子

1. はじめに

日本語の代表的な因果関係を表す「から・ので」が中国語に翻訳される際、それに対応する中国語表現では「有標識（「関連詞語」⁽¹⁾を用いるもの）」と「無標識（「関連詞語」を用いないもの）」の2種類が観察され、「無標識」のものが比較的多く見られる。中国語の因果複文においては、「関連詞語」を使用する場合と、省略する場合といずれもあり、「関連詞語」の使用の自由度が高いと言える。しかし、「関連詞語」が省略されたものの中では、そもそも因果関係を表す「関連詞語」が使用できないもの、あるいは必要ではないものもあるのではないかと筆者は考える。これについて、本稿の中で検討し、両言語の接続表現の使用範囲の差異を見極めたい。

また、「有標識」の場合には多種多様な表現に置き換えられている。それは、訳者の原文への理解や表現意図との関係があるが、場合によっては、文の表現内容とも深く関わっていると考えられる。「から・ので」はいろいろな文脈の中で用いられ、いろいろな原因・理由を表せるため、機能領域が幅広いと言える。中国語では、そのような機能を持つ表現がないため、「関連詞語」の使用は表現内容への配慮が必要だと考えられる。本稿では、上記の考えを元にして、両言語の接続表現の機能領域の相違についても検討したい。

2. 日本語の「から・ので」の用法分類

および中国語の「因果複文」について

本論に入る前に、まず「から・ので」の用法分類および中国語の「因果複文」について説明しておく。

2.1 「から・ので」の用法分類

「から・ので」の用法分類⁽²⁾に関しては、多くの先行研究で言及されているが、大まかに【表1】のようにまとめられる。

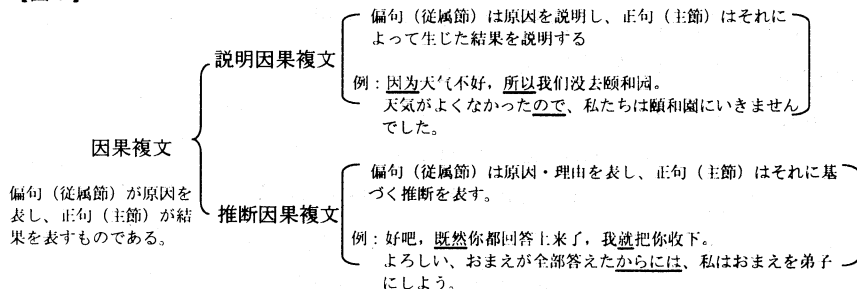
【表1】 「から・ので」の用法分類

項目	用法
から	① 単なる原因、理由を表す「から」（「ので」に言い換えることができる）
	② モダリティ形式と共起する「から」
	③ 主節の「のだ」「のです」に続く「から」
	④ 結果や帰結を先に述べ、原因・根拠・理由などを後から説明的に述べる「から」
	⑤ 「からには」「からは」「からこそ」など
	⑥ 終助詞的用法
	⑦ 原因・理由を表さない「から」
	⑧ 慣用的な用法 ⇒ 例：「お願いだから、手伝ってよ。」
ので	① 単なる原因・理由を表すもの（「から」に言い換えることができる）
	② モダリティ形式と共起するもの
	③ 終助詞的用法
	④ 慣用的な言い回しのもの「～というので」

2.2 中国語の「因果複文」について

中国語の「因果複文」については、分類方法が多くあるが、ここで、主流の分類と言える刘月华他（1991）のみを【図1】にまとめて取り上げる。

【図1】



3. 考察対象および調査方法・資料

【表1】でまとめたように、「から・ので」の用法は多様である。しかし、本稿では因果関係を表す複文における日中対照に重点を置くため、終助詞的用法や理由を表さないものは考察対象から除外する。

本稿で論じる具体例としての資料の採集と分析の方法は以下のとおりであ

る。① 日本語原文から「から・ので」の実例をピックアップして、その翻訳との対応関係を観察し考察を行う。② 手順①で得られた結果を裏付けるため、中国語原文とその日本語翻訳の対応関係を観察する。その方法は①とは異なり、まず日本語訳文から「から・ので」を含む因果関係を表すものを抽出する。そして原文を辿り、それらがどのような表現から翻訳されたかについて観察する。

調査資料は筆者によるデータベースおよび「日中対訳コーパス」などを用いる。そのうち、1つの原作に対して、複数の訳本を持つものもある。用例出典の一覧表は本稿末に挙げている。扱う用例では、会話文と地の文があるが、その区別は（会）と（地）として略記する。

4. 接続表現の使用範囲における両言語の差異

「から・ので」に対応する中国語表現では、「無標識」のものが極めて多く観察される。その中では、実際に「関連詞語」を用いても不自然ではないものがあるが、もともと因果関係を表すマーカ―を使用できないものや使用しにくいものもある。以下この種のものについて実例を通して検討する。

4.1 日本語が原文である場合

4.1.1 場面描写文における両言語の差異

(1) その杉は岩にうしろ手を突いて胸まで反らないと目の届かぬ高さ、しかも実に一直に幹が立ち並び、暗い葉が空をふさいでいるので、しいんと静けさが鳴っていた。 (地)『雪』

(1a) 杉树很高，要不仰着胸背着手撑住岩石，简直看不到树梢。而且树干都排成一条线，笔直地耸立着，深绿色的叶子遮住了天空，显得深沉而静谧。《雪①》

(1b) 杉树亭亭如盖，不把双手撑着背后的岩石，向后仰着身子，是望不见树梢的。而且树干挺拔，暗绿的叶子遮蔽了苍穹，四周显得深沉而静谧。 《雪②》

(1c) 杉树长得很高，非要把手放在背后，撑在石头上，仰起上半身才能看到树梢。一株株的杉树，排成一行行的，树叶阴森，遮蔽天空，周围渺无声息。

⇒ 《雪③》

(2) 月が西に傾いたので、白い光りの一帯は半切ほどに細くなった。(地)『吾』

(2a) 月儿裁西，银光如练，但已瘦削，宛如半裁信纸。《我①》

(2b) 月已西斜，射进来银白色的光带已变得狭长了。《我②》

(1)、(2)のような場面描写文は「ので」が用いられるが、訳文では因果関係を表す表現が用いられていない。その理由は中国語の描写文において、相対的に静止している状態を描写する場合、複文内の関係は並列関係になるためである。この点について、趙恩芳(1998)は「節と節を組み合わせて、ある場面を描出する場合、描かれた周囲のものが同時に存在していれば、相対的に静止している状態だと言える。この種の複文は内容的には共時的であり、複文の中で反映された節と節の関係は並列関係である」(新田訳)と述べている。趙恩芳によると、日本語の因果関係を表す複文は中国語に訳される際に、因果関係を表す「関連詞語」を持ちにくく、並列複文に訳される傾向が強いということがわかる。

また、上例を通して、日本語は形式を重視し、描写文であっても、従属節と主節の関係を明確に示すのに対して、中国語は前件と後件の関係を示すことより表現手法に工夫を凝らしているということもわかる。「树叶阴森，遮蔽天空，周围渺无声息」「月儿裁西，银光如练」などの文でも、ひとつの事象を4文字で並列して表し、文体のリズム感を重視しており、描写文において、中国語は表現手法にこだわるのがうかがえる。

4. 1. 2 感想や気持を訴える文における両言語の差異

(3) 「まるで犬に芸を仕込む気でいるから残酷だ。」 (会)『吾』

(3a) “这简直和戏弄小狗一般，太残酷啦。” 《我①》

(3b) “简直像教小狗练功，太残酷。” 《我②》

(4) 「…君は十年前と容子が少しも変っていないからえらい」 (会)『吾』

(4a) “…老兄和十年前一点都没变样，了不起！” 《我①》

(4b) “…你和十年前的劲头丝毫没变，真了不起！” 《我②》

(5) 「心にもないこと。東京の人は嘘つきだから嫌い。」 (会)『雪』

- (5a) “言不由衷的话，东京人净爱说它，真讨厌！” 《雪①》
 (5b) “胡扯！东京人尽爱撒谎，讨厌！” 《雪②》
 (5c) “言不由衷。东京人最会撒谎，讨厌。” 《雪③》

主節に、ある事または聞き手について感想を述べたりする表現が来る場合、日本語原文では「から」が使用されているが、訳文では、因果関係を表す接続表現を使用する必要がないと言える。上例の原文の主節は、すべて話し手の感情が含まれている表現の「残酷だ／えらい／嫌い」が使用され、そのような気持が生じた理由を表す「から」の使用を必要とするが、訳文では、聞き手にそのような気持が生じた理由を問われないうざり、理由より、気持を表すことが重視されるように思われる。たとえば、(5)の原文は話し手の〈駒子〉と恋人の〈島村〉との会話で、因果関係を表す「から」が用いられても、文脈から本気に「嫌い」という感情が読み取れず、むしろ恋人への甘えの気持が含まれたニュアンスが感じられる。一方、訳文では、因果関係を表す表現が使用されると、ニュアンスが完全に変わってしまい、本気に「嫌い」と聞こえてしまう。したがって、中国語では、目の前にいる聞き手に対して、あることの因果について述べるときには「関連詞語」を用いるが、単なる自分の気持をストレートに表そうとする場合には、因果関係を表す「関連詞語」を使用できないと言える。

4. 1. 3 モダリティ形式と共起する文⁽³⁾における両言語の差異

- (6) 「私が笑われるから、帰って頂戴。」 (会) 『雪』
 (6a) “人家会取笑我的，你快回去吧！” 《雪②》
 (6b) “人家要笑我的，你回去吧。” 《雪③》
 (7) 「香一柱もあまり唐突だから已めろ」 (会) 『吾』
 (7a) “‘香一炷’？太突然，见鬼去吧！” 《我①》
 (7b) “‘一炷香’也太突然，去掉它！” 《我②》
 (8) 「もう遅いから早く帰りましたまえ。」 (会) 『こ』
 (8a) “已经很晚了，快点回去吧。” 《心①》

(8b) “已经很晚啦，早点儿回家吧！” 《心②》

(6) (7) (8)の原文において、主節に依頼表現、命令表現などが来る「会話文」の場合は、その依頼する理由、あるいは命令する理由を表す表現を必要とするが、訳文において、いずれも原因・理由を表す表現が使用されていない。その理由のひとつは、因果関係を表す表現が用いられていなくても、前後節の内容から、意味関係が読み取れるからである。たとえば、(8a)の前件の「很晚了」が明らかに後件の「快点回去吧」と命じられた理由になっている。もうひとつの理由は、この種類の文においては、因果関係をはっきりさせると説明的な意味合いが強くなり、命令や依頼の語気が弱まるからである。もともと、中国語の複文では、「関連詞語」を省略する場合がよくあり、特に会話では物事の因果について述べる会話ではない場合、因果関係を示す表現の使用が好ましくない傾向がある。

4.2 中国語が原文である場合

原文が中国語である場合、今回収集したデータから4.1で述べたいくつかの傾向もほぼ観察された。以下、まとめて実例を提示する。

(9) 六七根长的短的烟袋，一齐抽起来；团团缕缕的白色烟雾，在他们头顶上那棵老槐树的枝杈间盘旋着，消散着， (地)《金光》

長いきせるや短かいきせるがあわせて六、七本。のべつまくなしにスパスパやるものだから、白い煙りが頭上のえんじゅの古木の枝から枝を雲のようにただよい大空へ消えていく。『輝け』

(10) “我这手上都是肥皂沫子，替我打一桶吧。” (会)《金光》

「手が石けんだらけだから、一杯汲んでちょうだい」 『輝け』

(11) “小林，你身体很坏，把这件背心穿在身上吧。” (会)《青春》

「道静、あなたは身体が悪いから、これをきなさい」 『青春』

(12) “她把你说得像小说里的人物，可有意思啦。” (会)《青春》

「従姉はあんたのことを、まるで小説の中の人物のように話すので、とても面白くてね。」 『青春』

(9)はある場面についての描写文であり、文面から前後節の因果関係がほとんど読み取れないが、「から」が使用された日本語訳文では、「長いきせるや短かいきせるがあわせて六、七本。のべつまくなしにスパスパやる」ことを理由として、「白い煙りが頭上のえんじゅの古木の枝から枝を雲のようにただよい大空へ消えていく」という状態になった結果を表そうとしている。(10)(11)の原文では因果関係を表す標識が使用されていないが、日本語訳になると、主節が依頼、命令などの表現であっても、その理由を示す標識を必要とするという例になっている。また、(12)の原文は主節に、ある事についての感想が述べられているが、その感想が生まれた理由を示す標識が使用されていない。一方、日本語訳では主節の「とても面白くてね」という感想が生じた理由が「ので」によって示されている。

5. 接続表現の機能領域における両言語の差異

「から・ので」が中国語に翻訳される際、それに対応する「有標識」のものは様々である。訳文では、「関連詞語」を使用するか否か、あるいはどのような「関連詞語」を使用すれば、適切であるかは、訳者の原文のとらえ方、または訳者の表現意図との関係があると考えられる。しかし、それだけではなく、文の表現内容の制約を受ける場合もあるのではないかと筆者は考える。原文のニュアンスを正確に訳そうとすると、訳者は典型的な「関連詞語」だけでなく、表現内容によって、因果関係を表す「副詞」や他の「関連詞語」の使用も必要とされる。

5.1 日本語が原文である場合

5.1.1 叙述性の高い文における「から・ので」と中国語相当表現

- (13) 総てこの沿岸はその時分から重に学生の集まる所でしたから、何処でも我々には丁度手頃の海水浴場だったのです。(地)『こ』
这里沿岸一带，从那时候起主要是学生们聚集的地方，所以到处都是对我们正合适的海水浴场。 《心①》

(14) 主客の対話は途中からであるから前後がよく分らんが、…。(地)『吾』
因为半路才听, 对宾主对话的来龙去脉不大清楚;…。 《我①》

(15) 引磬は紐でむすんだ金の棒で、力強く磬をたたくので、本堂の磬子よりは
強くひびいてくる。(地)『雁』

引磬用绳子系着的金棒子使劲地敲打, 因此, 比大殿里挂磬的声音还响。《雁》

ここで、例示した複文において、理由を表す部分を“P”、結果を表す部分を“Q”と表記すると、上例の訳文は、(13)が“P, 所以Q”型、(14)が“因为P, Q”型、(15)が“P, 因此Q”型となり、「から・ので」と対応している。これらはいずれも刘月华(1991)のいう「説明因果複文」の標識である。“因为P, Q”型は原因・理由を表し、“P, 所以Q”型は結果を表す。“P, 因此Q”型は“P, 所以Q”型とほぼ同じ機能を持っている。現代中国語の「説明因果複文」においては、“因为P, 所以Q”型が代表的な標識であるが、“因为P, Q”型と“P, 所以Q”型はそれぞれの省略形式と認められる。それらを使用する場合、一般的には原因及び結果が事実であることを条件とする。つまり、事実に基づき、因果を述べる場合に用いられる表現である。この点について、邢福义(2002)は“因为P, 所以Q”型は一般的には「已然の因果関係」を表す。つまり、実現したことについて因果を述べる。」(新田訳)と示している。したがって、叙述性の高い文において、単なる事実に基づき、因果関係を表す「から・ので」は中国語に訳される際に、“P, 所以Q”型、“因为P, Q”型、“P, 因此Q”型に対応する傾向があると考えられる。

5.1.2 マイナスニュアンスを帯びる文における「から・ので」と中国語相当表現

単なる事実に基づき客観的に因果を述べる「から・ので」によって結び付けられた原文の従属節か主節かあるいは文の全体に、「不愉快」であり、マイナスの意味合いが含まれている場合、中国語では次のような表現を用いて、それに対応する傾向がある。

(16) 「すると一日動かずにおったものだから、胃の具合が妙で苦しい。」

⇒ (会)『吾』

“这时，由于我一整天也没怎么活动，胃里十分不舒服。”《我②》

(17) わたしは怖しく呆んやりしていたので、乗ってしまってまたはげしく咳込み、 (地)『挽』

由于既害怕又神思恍惚，上车后再次剧咳不止。 《挽》

(18) 前足の運動が猛烈なので稍ともすると中心を失って倒れかかる。(地)『吾』

由于两条前腿要猛烈活动，往往失去重心，几乎跌倒。 《我②》

上例の訳文ではいずれも“由于P，Q”型を用いて「から・ので」と対応している。“由于P，Q”型は、前述した“因为P，Q”型と同様に、「原因・理由」を表す機能を果たしている。屈哨兵(2002)は“由于”文の語義偏向について調査を行い、結論的には「“由于”文は『不愉快』な語義偏向がある。“由于”型は現代漢語において、基本的には『不愉快型』である。」(新田訳)と述べている。また、“由于”文において、マイナスの意味合いを含む表現内容のパターンについては「ある文には原因を表す従属節と結果を表す主節ともに現れ、ある文には原因を表す従属節のみ現れ、ある文には結果を表す主節のみ現れる。」(新田訳)と指摘している。つまり、“由于P，Q”型は好ましくない因果を述べるときに使われる傾向がある。“由于P，Q”型には上記のような機能があるため、従属節か主節かまたは文全体の表現内容にマイナスの意味合いを含んでいる「から・ので」文が中国語に訳される際、原文のニュアンスをうまく表現するために、“由于”という「関連詞語」が用いられている場合が多い。上例の原文を見ると、「胃の具合が妙で苦しい」「わたしは怖しく呆んやりしていた」「中心を失って倒れかかる」というマイナスの意味合いが表現されており、これに対して訳文では“由于”を用いてそのニュアンスを的確に伝えている。

5.1.3 行動の理由を表す「から・ので」文と中国語相当表現

「行動の理由」を表し、継起関係を伴う「から・ので」文は、中国語の“P，就(便)Q”型と“P，于是Q”型に対応する傾向が観察される。

(19) 眼をあいている(ママ)と飲みにくいから、しっかり眠って、またびちゃびちゃ始めた。 (地)『吾』

睁着眼睛喝不舒服，便死死地闭上眼睛，又吧嗒吧嗒地舔起来。《我①》

(20) 僕は咽がひりひり痛むので、リュックサックから瓶を取出して水をラップ飲みにした。 (地)『黒』

我感到喉咙阵阵作痛，就从帆布包里拿出水瓶来，嘴对着瓶口喝开了。《黑》

(21) 何か私に用事がありげに見えたので、私はそつとその後を追った。

⇒ (地)『斜』

我看他仿佛有什么事要找我，于是悄悄地跟在他后面。《斜》

上例の訳文では、“P，就Q”型、“P，便Q”型、“P，于是Q”型を用いて、「行動の理由」を表す「から・ので」に対応している。“就、便”は時間の前後継起を表し、二者の間に一定の関係があることを示す機能を持つため、“就、便”によって接続された前後節の関係には継起関係が含まれていると考えられる。また、王起瀾(1989)は「“…于是…”は因果関係を表す時に継起関係を表す意味も含まれている」(新田訳)と述べている。このように、“P，于是Q”型は「説明因果複文」の標識として使われているが、“P，所以Q”型などとは違い、継起関係を表す意味も含んでいる。

一方、原文から時間的な継起関係も読み取れる。例えば、(20)まず「咽がひりひり痛む」と感じてから、次に「リュックサックから瓶を取出して水をラップ飲みにした」という動作が行われたと理解でき、前後節に時間的な継起関係が含まれていることが明らかになっている。

5.1.4 不本意な行動の理由を表す「から・ので」文と中国語相当表現

(22) 「仕方がないから頭からもぐり込んで、眼を眠って(ママ)待って見ましたが、」

⇒ (会)『吾』

“没办法，只好把头缩进被窝，闭上眼睛等待。” 《我①》

(23) 夫の語気が烈しいので、細君は口を噤んで了った。 (地)『布』

丈夫语气很冲，妻子只好闭嘴不说了。 《棉》

- (24) 傍にいる私はむずがゆい心持がしたが、母の言葉を遮る訳にも行かないので、黙って聞いていた。 (地) 『こ』

我在一旁急得如坐针毡，却又不能拦住母亲，只得一声不响地听着。《心①》

上例の原文において、(22)(23)(24)のいずれも、従属節の理由によって主節で行われた行動は、動作主が心理的に抵抗のある行動だということがわかる。訳文では、それぞれ“只好”“只得”⁽⁴⁾を用いて、「から・ので」に対応している。“只得”“只好”というような表現について王维贤他(1994)は「“因为A，所以B”という表現形式は、「心理的色彩」を帯びない因果関係を表す複文であるが、“因为A，可以B”、“因为A，只好B”などのような表現形式には一定の「心理的色彩」が含まれている」(新田訳)と指摘している。これによれば、“只得”“只好”を用いて表した因果関係は「心理的色彩」を帯びる因果関係だと言える。“只得”“只好”は前の原因のため他の選択の余地がなく、そうせざるを得ないことを表す場合に使用されている表現であるため、「不本意な行動の理由」を表す「から・ので」文が中国語に訳される際に、原文のニュアンスを適確に伝えようとすると、“P，只好(只得)Q”型が使用される場合が多い。

5.2 中国語が原文である場合

原文が中国語である場合、5.1で述べた傾向も大方見られた。

- (25) 婉儿的座位正靠着窗，斜对着房门，所以觉慧一进来，她就看见了。

⇒ (地) 《家》

婉児の腰かけていたのは窓に近く、入口と斜向いであつたから、觉慧がはいつてゆくとすぐ彼女の眼についた。 『家』

- (26) 由于他年龄过小，刚一进阅览室就听到声严厉的警告：“小孩儿不让进。”

⇒ (地) 《活》

年が小さすぎるので、閲覧室に足を踏み入れた途端に厳しい声が飛んできた

「子供はダメよ」 『応』

(27) 后来我看见那小姑娘出来了，于是跳下炕到门外去招呼她，(地)《我在》

そのうち昨日の娘が姿を見せたので、オンドルから飛びおり外へ出て声をかけたが、 『霞』

(28) 余永泽知道她的脾气，只好愁闷地点点头，不再说下去。(地) 《青春》

余永沢は、かの女の気性を知っているので、憂うつそうにうなずくだけで、それ以上反対しようとはしなかった。 『青春』

原文(25)は単なる事実に基づいて因果を述べる文であり、“P, 所以Q”型が使用され、因果関係を表している。(26)は従属節の「他年齢过小」という原因で、「刚一进阅览室就听到声严厉的警告」という結果になっている。前件と後件の表現内容を合わせてみるとマイナスの意味合いが含まれ、“由于P, Q”型が使用されている。(27)は時間的な継起関係が含まれているもので、“P, 于是Q”型が使用され、前後節の関係を示している。(28)は「愁闷地点点头」という動作が行われ、「点点头」を修飾する「愁闷地」という表現から動作主のやむを得ない心理的な動きが窺え、“P, 只好Q”型が使用されている。一方、訳文では、文の内容やニュアンスの制約を受けず、「から・ので」を用い、原文に対応している。このような結果によって、「から・ので」は色々なニュアンスを帯びる文に用いられることが裏付けられ、「から・ので」の機能領域が幅広いということもさらに証明できた。

6. まとめ

以上、両言語の因果関係を表す複文における「接続表現の使用範囲」と「接続表現の機能領域」の差異について検討してきた。その結果は大まかに以下のようにまとめられる。

- 1) 日本語の原因・理由を表す接続表現の使用範囲は中国語より広い。日本語は文の性格の制約を受けず、因果関係を述べる典型的な文だけでなく、描写文、モダリティ形式と関係している文でも、接続表現の使用を必要とする。一方、中国語は接続表現を使用すると、文のニュアンスが変わる場合があり、特に会話文では接続表現の使用を避ける傾向がある。また、描写

文では、並列文となり接続表現が使用されないことが多い。

- 2) 日本語の「から・ので」の機能領域は中国語より広い。表現内容の制約を受けにくく、多様な原因・理由を表せる。「から・ので」が中国語に翻訳される際、正確であり自然な効果を求めようとする、表現内容によって、用いる「関連詞語」が違ってくる場合がある。典型的な「関連詞語」による表現のみでは、一部の因果関係を表す複文のニュアンスを表現しきれない。

【表2】機能領域における両言語の差異

文の表現内容の性質	日本語表現	中国語表現	備考
単なる事実の因果を述べる。	から、ので	因为、所以、因此等	连词(接続詞)等
ある事実に基づいて、好ましくない因果を述べる。	から、ので	由于	连词
事実の因果とともに、時間的な継起関係も含まれる。	から、ので	于是、就、便	连词、副词(副詞)
主節の不本意な行動とその理由を述べる。	から、ので	只好、只得	副词

7. おわりに

本稿において、両言語の因果関係を表す複文における「接続表現の使用範囲」と「接続表現の機能領域」の2つの視点から対照研究を試みた。いくつかの傾向が観察されたが、考察対象が限定されている上、データに偏りがあるため、まだ十分とは言えない。今後さらに範囲を広げ、検討したいと思う。

注

- (1) 関連作用を行う語句のことを指す。関連詞語は主として接続詞の「但是」、「如果」、「然而」など、副詞「又」「才」「就」等および一部の短語が当てられる。その働きは主に複文中の前件・後件を接続し、その構造的関係を表すことである。鈴木(1992)
- (2) 「から・ので」の用法分類については、主に永野(1952)、森田(1980)、白川(1991) 蓮沼(2001)を参照した。
- (3) この種の例文を収集する際に、主に仁田・益岡(1989: 34-40)を参照した。
- (4) 分句を接続し、因果関係を表す。つまり前分句は原因を表し、後分句は“只得”を用いて、前の原因のため他の選択の余地がなくそうせざるを得ないことを表す。“只好”

は分句を接続し、因果関係を表す。用法は“…只得…”と同様である。(新田訳)。

王起瀾(1989)による。

用例出典

『雪』『雪国』 川端康成 新潮社2002(1947)

《雪①》《雪国》徐輔材・杜水源译 《花的圆舞曲》 湖南人民出版社 1985

《雪②》《雪国》叶渭渠译 《雪国 古都 千只鹤》译林出版社 2001

《雪③》《雪国》高慧勤译 《世界中篇小说经典文库・印度、日本卷》九州图书出版社 1996

『吾』『吾輩は猫である』 夏目漱石 新潮社2002(1905)

《我①》《我是猫》于雷译 吉林大学出版社 2000

《我②》《我是猫》刘振瀛译 上海译文出版社 1994

『挽』『挽歌』原田康子 新潮社1961

《挽》《挽歌》林少华・张洁梅译 北京十月文艺出版社 2000

《家》巴金 《巴金全集》 第一卷 人民文学出版社 1986

『家(上・下)』 飯塚 朗訳 岩波書店1983 (1956)

《我在》《我在霞村的时候》丁玲 《丁玲文集》 湖南人民出版社 1982

『霞』『霞村にいた時』 江上幸子訳 『中国現代文学珠玉選』二玄社 2002

北京日本学研究中心(2003)「日中対訳コーパス」

【日本語が原文である】

『こ』『こころ』 《心①》《心②》 《心》

『黒』『黒い雨』 《黒》 《黒雨》

『雁』『雁の寺』 《雁》 《雁寺》

『布』『布団』 《棉》 《棉被》

『斜』『斜陽』 《斜》 《斜陽》

【中国語が原文である】

《青春》《青春之歌》 『青春』『青春の歌』

《金光》《金光大道》 『輝け』『輝ける道』

《活》《活动変人形》 『応』『応報』

参考文献

- 白川博之 (1991) 「「から」で言いさす文」『広島大学教育学部紀要第2部』第39号
- 鈴木義昭 (1992) 「現代中国語の「关联词语」について」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要4』
- 永野賢 (1952) 「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29-5
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 新田小雨子 (2004) 「順接型の接続助詞「から」と中国語の相当表現の対照研究」『早稲田大学日本語教育研究』第4号
- 蓮沼昭子他 (2001) 『日本語文法セルフマスターシリーズ7条件表現』くろしお出版
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 王 起瀾 (1989) 《汉语关联词词典》福建人民出版社
- 王 维贤他 (1994) 《现代汉语复句新解》华东师范大学出版社
- 屈 哨兵 (2002) 「“由于”句的语义偏向」《中国语文》第1期 (总第286期)
- 邢 福义 (2002) 《汉语复句研究》商務印書館
- 赵 恩芳他 (1998) 《现代汉语复句研究》山東教育出版社
- 刘 月华 (1991) 『現代中国語文法総覧(下)』くろしお出版

(にった さよこ)